

18	豊田	西広瀬小学校	すずき かずゆき
			氏名 鈴木 千之
分科会番号	3	分科会名	社会科教育（小学校）

研究主題

**郷土の先人の働きを通して、地域への理解と愛着を深め、
主体的に社会に関わろうとする児童の育成**

— 4年 社会科「めざせ！枝下用水博士」の実践を通して —

研究要項

1 主題設定の理由

小学校学習指導要領解説社会編の第4学年の目標の中に、「社会的事象について、主体的に学習の問題を解決しようとする態度や、よりよい社会を考え学習したことを社会生活に生かそうとする態度を養うとともに、思考や理解を通して、地域社会に対する誇りと愛情、地域社会の一員としての自覚を養う」とある。中学年では、地域社会に関する内容を取り上げ、自分たちの市や県を中心とした社会生活を総合的に理解し、上記の目標を達成することをねらいとしている。そこで、本学級の児童の実態を把握するために「自分の住む町は好きですか」とアンケートを取ったところ、全員が「好き」と回答した。また、「町のじまんは何ですか」という質問には、「矢作川」や「飯野川」「丸根山」など、学校周辺の自然環境を挙げている児童が多かった。本校では、長年にわたり矢作川の水質汚濁調査や飯野川清掃を行っており、児童の環境に対する関心は高い。その一方で「旧枝下用水路」や「西広瀬城址」といった学区に残る史跡を挙げた児童はおらず、地域の歴史や文化については、ほとんど知らないか関心が低いという状態であった。また、「ごみのしよりと利用」の学習では、グループでの話し合いを通して「ごみの量を減らすために家でしっかりと分別する」「まだ使えるものは兄弟で使う」といった意見が出された。しかし、実際に行動に移した児童は少なく、ごみ問題を自分の課題としてではなく、他人事として捉えている様子が見られた。このことから、地域に対する認識が限定的であり、課題を自分事として捉えることが十分にできていないことが分かった。

現代社会においては、人口減少や地域のつながりの希薄化などの課題が指摘されており、地域社会の持続的な発展のためには、地域に関わり、支えていこうとする人材の育成が求められている。社会科の学習においても、地域に対する愛着をもち、地域課題を自分事として捉え、よりよい社会の実現に向けて考える力を育成することが重要である。

そこで、本実践では、児童にとって身近でありながら十分に認識されていない「枝下用水」と、その開削に尽力した西澤真蔵に着目した。地域の先人の働きを学ぶ際に、社会の変化と関連付けて捉えたり、当時の人々の願いや工夫に迫ったりすることによって、社会的事象を自分事として理解することができると考えた。また、地域の「人・もの・こと」と関わる体験的な学習や交流の場を設定することで、児童は実感を伴って理解を深めるとともに、地域に対する誇りや愛着を高めることができると考えた。さらに、学んだことを発信する活動を取り入れることで、地域の一員として社会に関わろうとする意識を育てることが期待できる。

以上のことから、本研究の主題を「郷土の先人の働きを通して、地域への理解と愛着を深め、主体的に社会に関わろうとする児童の育成」と設定した。

2 めざす児童像

本研究の実践を通してめざす児童像を以下のように設けた。

郷土の先人の働きを通して、地域への理解と愛着を深め、主体的に社会に関わろうとする児童

3 研究の仮説と手立て

【仮説1】 郷土の用水や先人の働きに関わる素朴な疑問をもとに、単元を貫く学習問題を設定すれば、児童は地域の出来事を自分事として捉え、主体的に学習問題を追究することができるだろう。

〈手立て①〉児童の疑問をもとにした問題解決的な単元構想

児童の素朴な疑問をもとに学習問題を設定し、その解決に向けて単元全体の流れを児童と話し合いをしながら決めていく。思考の流れを踏まえて学習を展開し、見通しをもった追究活動が連続する単元構想にすることで、児童の学習意欲が継続していくようにする。

【仮説2】 地域の方や博物館などと連携し、見学・体験・交流を通して多様な立場や資料に触れる学習の場を設定すれば、児童は先人の働きと人々の願いや地域の発展を関連付けて考え、地域への理解と愛着を深め、主体的に社会に関わろうとするだろう。

〈手立て②〉社会的な見方・考え方を働かせる資料の提示と学びの蓄積

資料をもとに整理するワークシートを用い、時間の変化や人々の願い、生活との関連に着目させるとともに、比較・関連付けを通して多面的に考察する。また、プリントのファイリングや掲示により学びを蓄積し、振り返りながら思考を深められるようにする。

〈手立て③〉「人・もの・こと」と関わる体験的学習

枝下用水資料室や博物館との連携、昔の道具の体験学習や、ゲストティーチャーとの交流、現地の見学の場を設定する。これらを通して、用水開削前後の人々の願いや生活の変化などを具体的事象として捉え、多様な視点から考えられるようにする。

〈手立て④〉学びを振り返り、表現・発信する場の設定

学習のまとめとして、用水の価値や地域の取り組みについて考えたことを整理し、発表や提案などの形で表現・発信する場を設定する。枝下用水資料室の方を招き、児童の発表に対して講評していただくことで、学習の達成感を高めるとともに、地域への愛着を深め、地域の一員として社会に関わろうとする意識につなげる。

4 抽出児童について

抽出児童	児童の現状	教師の願い	教師の支援
A 児	校区の自然環境について関心はあるものの、校区に関わる偉人や史跡には関心を示すことが少ない。また、課題について考えることができるが、自分事として捉えることが難しい。	校区に関わる偉人や史跡に関心をもち、さらに自分が住む地域について愛着をもってほしい。そして、積極的に社会に関わろうとする意識をもてほしい。	ゲストティーチャーとの交流や現地の見学などを通して、校区に関わる偉人や史跡について探究できる場を設定し、課題に対して主体的に追究できるようにする。

5 実践と考察

(1) 手立て① 児童の疑問をもとにした問題解決的な単元構想

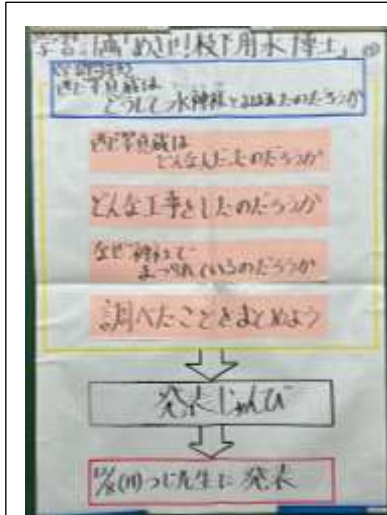
単元の導入では、用水の存在に気付かせるために「豊田市のお米の生産量が多い」という事実を示し、これに対する「なぜ多いのだろう」という児童の素朴な疑問から課題を設定し、資料を用いた調べ学習を行った。その要因の一つが枝下用水の開削だということにたどり着くと、児童は「枝下用水は2年生のときに見に行ったよ」と、嬉しそうに自身の体験と結び付けて発言した。そこで、「枝下用水はいつできたのか」「どのようにしてできたのか」という新たな疑問を取り上げ、次の学習課題として位置付けた。このように、課題の解決とともに次の疑問が生じる問いの循環を意識し、児童の学びが途切れない学習の流れを構成した。また、児童の「もっと調べたい」「みんなにもっと知ってほしい」という思いから、「みんなで枝下用水博士になろう」と提案し、単元名を「めざせ！枝下用水博士」とした。「単元の終わりに、枝下用水博士と胸を張って言うようにしましょう」と投げかけ、追究がスタートした。

児童から出された枝下用水に関する疑問については、2年生のときにお世話になった枝下用水資料室の方にメールで回答をいただき、その内容を資料として活用した。これにより、西澤真蔵が「水神様」と呼ばれ祀られている事実に児童が気付き、「なぜ水神様と呼ばれたのか」という疑問を単元を貫く学習問題として設定した。さらに、この問題を解決するために調べたい内容について児童同士で話し合い、「西澤真蔵の人物像」「当時の工事の様子」「神社で祀られている理由」といった視点で整理し、順序立てて追究していく計画を立てた【資料1】。こうすることで、児童は学習に見通しをもつことができるようになり、主体的に学習に取り組む態度へとつながった。

さらに、児童の「自分たちが調べたことを多くの人に聞いてもらいたい」という願いから、単元の始めにメールでやり取りした枝下用水資料室の方を単元の終わりに招き、発表を聞いてもらうことにした。このことを児童に伝え、A児は、「いろいろな人に協力してもらってちゃんとした博士になってみんなに教えたい」と記述し、学習への意欲を高めている様子が見えた【資料2】。

(2) 手立て② 社会的な見方・考え方を働かせる資料の提示と学びの蓄積

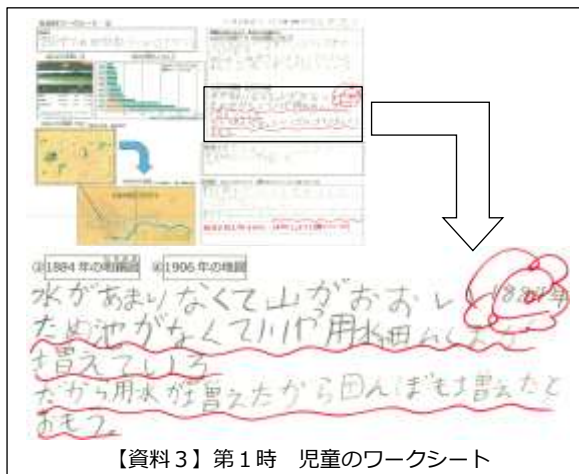
本実践では、副読本「豊田」の資料を用いて学習を行ったが、それだけでは捉えきれない視点を補うために、自ら収集した資料を提示した。第1時では、豊田市の利水の変化を表した地図を提示し、用水の広がりや土地利用の変化に着目させることで、時間の経過に伴う変化を捉えられるようにした。A児は地図上の変化には気付いていたものの、水田の増加と用水との関わりまでは十分に理解できていなかった。しかし、学級の中には用水が水田の増加を支えていることに気付く児童も見られた【資料3】。



【資料1】子どもたちの問いから立てた学習計画

西澤真蔵にはちくせうきけなけれど
ネットや本などで調べたりすること
をよくしている人などいろいろな人
に協力してもらってちゃんとした博士
になってみんなに教えたいです。

【資料2】A児の振り返り



【資料3】第1時 児童のワークシート

また、これらの資料を扱ったワークシートは毎時間ファイリングし、既習内容を振り返ることができるようにした。さらに、学習の流れを掲示として残すことで、これまでの学びと関連付けながら考える場を設けた。その結果、A 児がファイルや掲示物を手掛かりに既習内容を引用して話し合う様子も見られ、学びのつながりを意識させることができた【資料4】。



【資料4】掲示を活用して
意見を述べる A 児

（3）手立て③ 「人・もの・こと」と関わる体験的学習

本単元では、地域の「人・もの・こと」との関わりを通して社会的事象を実感を伴って捉えられるよう、体験的な学習を計画的に位置付けた。まず、児童が2年生の町探検で訪問した枝下用水資料室とのつながりを生かし、枝下用水についてメールで質問する活動を行った。その際、学習への意欲を高めるために資料室の方にビデオメッセージを依頼し、児童に提示した【資料5】。児童は自分たちの疑問が地域の方に届いていることを実感し、「まだ分からないことがある。今度は自分たちでもっと調べていきたい」とさらなる学習意欲の高まりへとつながった。



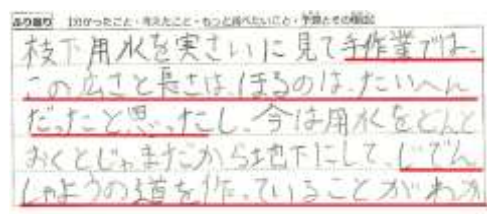
【資料5】枝下用水資料室
達先生からのビデオメッセージ

次に、豊田市博物館から昔の道具（くわ・すき・もっこ）を借用し、実際に使用する体験を取り入れた【資料6】。A 児は「もっこは重すぎて一人で持てなかった」「この工事を用水が壊れるごとに繰り返していたのは大変だったんだと思った」と発言し、枝下用水開削当時の作業の過酷さや人々の苦労を身をもって感じる事ができた。さらに、博物館を訪問し、用水のジオラマを観察することで、水がどのように引かれていたのかや、用水の規模や広がりをも具体的に捉えることができた。



【資料6】もっこを体験する A 児

また、博物館近くの枝下用水を実際に見学し、工事の様子も観察することができた。これにより、現代の工事との違いに気づき、事前の道具体験と関連付けながら、生活の変化について考えることができた。また、用水の上部が遊歩道として利用されていることにも着目し、現在の地域生活との関わりについても理解を広げることができた【資料7】。博物館見学後には、近くの樹木神社を訪問し、西澤真蔵の碑を見つけた。児童は、実際に現在でも地域で祀られている事実を目のあたりにすることで、あらためて西澤真蔵の価値について考えるきっかけとなった。



【資料7】A 児の振り返り

なぜ今でも西澤真蔵が祀られているのかを追究する場面では、西澤真蔵を祀る枝下川神社の総代である豊田土地改良区の方を招き、話を聞く機会を設定した。「当時は水争いが絶えず、お米の収穫量は人々の生死に直結していた」「用水の完成によって多くの農家の方が救われた」という話から、A 児は「西澤真蔵はたくさんの感謝から水神様とよばれた」と記述しており、用水受益者の思いや願いを知ることによって学習問題に迫ることができた。また、枝下用水が現在はパイプラインとして機能し、水害防止にも役立っていることを知り、用水の変化と人々の生活との関連を捉えることができた。

なぜ今でも西澤真蔵が祀られているのかを追究する場面では、西澤真蔵を祀る枝下川神社の総代である豊田土地改良区の方を招き、話を聞く機会を設定した。「当時は水争いが絶えず、お米の収穫量は人々の生死に直結していた」「用水の完成によって多くの農家の方が救われた」という話から、A 児は「西澤真蔵はたくさんの感謝から水神様とよばれた」と記述しており、用水受益者の思いや願いを知ることによって学習問題に迫ることができた。また、枝下用水が現在はパイプラインとして機能し、水害防止にも役立っていることを知り、用水の変化と人々の生活との関連を捉えることができた。

このように、多様な「人・もの・こと」との関わりを通して、資料だけでは得られない具体的なイメージや実感を伴った理解を促してきた。その結果、A 児は学習問題に対して、多様な立場や時間の経過という視点を関連付けて考えを深めることができた。

（４）手立て④ 学びを振り返り、表現・発信する場の設定

学習のまとめとして、枝下用水資料室の方を招いて発表する場を設定した。児童と話し合い、まとめる内容を「西澤真蔵の人生」「枝下用水工事」「まつられている西澤真蔵」「昔と今の枝下用水」という４つに整理し、グループに分かれてプレゼンテーション資料を作成した。Ａ児は「枝下用水工事」を担当し、昔の道具の体験活動や現在の工事見学で得た学びをもとに、当時と現在の工事の違いを比較してまとめた。その他にも児童から「西澤真蔵の功績を劇で表現したい」という提案があり、有志の児童が自主的に練習を重ねた。当日は、劇とプレゼンテーションを組み合わせた発表を行い、学習内容を分かりやすく伝えることができた【資料８】。発表後には資料室の方から講評をいただき、実際の見学や体験をもとにまとめた内容を評価していただいたことで、児童は大きな達成感を得ることができた。また、学習の成果を認める機会として、枝下用水資料室の協力を得て「枝下用水博士認定証」を作成し、児童に贈呈した【資料９】。児童の振り返りには、「当時の農家の気持ちを伝えることができた」「調べたことを伝えられてよかった。もっと枝下用水について知りたいと思った」とあり、当時の人々の思いや願いに共感する姿や、学習内容を自分事として捉え、さらに追究したいという意欲の高まりも確認することができた。最後に「今でも毎月、旧枝下用水路の清掃活動を行っている」という話を聞いたＡ児は、「清掃活動に参加してみたい」と言い、地域社会の一員として主体的に社会に関わろうとする意識を高めていた。



【資料８】劇「水神様になった商人」



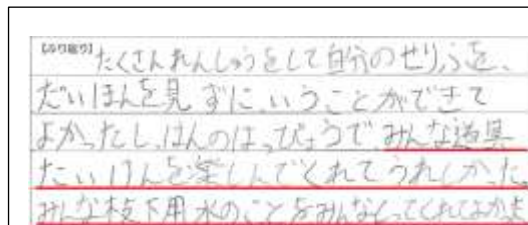
【資料９】枝下用水博士認定証贈呈

単元終了後には、総合的な学習の時間との合科的な学習として、実際に旧枝下用水路清掃活動に参加した。児童は、他の参加者の方々に助けをもらいながら、竹を切ったり、小枝を集めたりするなど意欲的に清掃を行った【資料１０】。Ａ児は、約１４０年前から残っている苔のついた用水路を見て、「やっぱりとても昔からあったんだ」と、これまでの学びと結び付けて感想を述べていた。また、他の児童は、「地域の人たちで協力しているから、ぼくたちも協力していきたい」と振り返りに書き、史跡を保全する地域の活動に参加していきたいという思いをもつことができた。



【資料１０】旧枝下用水清掃活動

年度末の学習発表会では、下級生や保護者に向けて、社会科と総合的な学習の時間で学んできた内容を、改めてまとめて発表した。発表では、保護者に対する昔の道具の体験や感想のアンケートを取り入れ、双方向的な学びの発信をすることができた。これらの取り組みにより、Ａ児は主体的に学びを振り返り、学習内容を他者に伝えることで達成感を得ることができた【資料１１】。



【資料１１】学習発表会 Ａ児の振り返り

以上のことから、学習成果を他者に発表したり、実際に地域活動へ参加したりすることで、枝下用水を守り受け継ぐことの大切さを考え、地域に対する愛着を感じ、自分も地域のために行動したいという意識を高めることができた。

6 研究の成果と今後の課題

(1) 成果

【仮説1】 郷土の用水や先人の働きに関わる素朴な疑問をもとに、単元を貫く学習課題を設定すれば、児童は地域の出来事を自分事として捉え、主体的に学習問題を追究することができるだろう。

〈手立て①〉子どもの疑問をもとにした問題解決的な単元構想

児童の疑問をもとに課題を設定し、解決したことを次の問いへとつなげる探究的な学びのプロセスを展開したことで、児童は見通しをもって主体的に学習に取り組むことができた。また、自分たちで追究する内容や順序を考えたことで、「もっと知りたい」という思いを持続させながら学びを深める姿が見られた。以上のことから手立て①は有効であったと考える。

【仮説2】 地域の方や博物館などと連携し、見学・体験・交流を通して多様な立場や資料に触れる学習の場を設定すれば、児童は先人の働きと人々の願いや地域の発展を関連付けて考え、地域への理解と愛着を深め、主体的に社会に関わろうとするだろう。

〈手立て②〉社会的な見方・考え方を働かせる資料の提示と学びの蓄積

副読本に加えて地図や写真などの資料を提示したことで、児童は変化や関連に着目しながら社会的事象を捉えることができた。また、ワークシートのファイリングや学習過程の掲示により、既習内容を根拠として活用しながら考えることができた。その結果、学びを関連付けて整理し、多面的に考察する力の向上につながった。以上のことから手立て②は有効であったと考える。

〈手立て③〉「人・もの・こと」と関わる体験的学習

地域の「人・もの・こと」と関わる体験的な学習を取り入れたことで、児童は枝下用水や西澤真蔵について、資料だけでは得られない実感を伴った理解を深めることができた。その結果、学習問題について、過去と現在、多様な立場を関連付けながら考察する姿が見られた。以上のことから手立て③は有効であったと考える。

〈手立て④〉学びを振り返り、表現・発信する場の設定

学びを振り返り、表現・発信する場を設定したことで、児童は学習内容を整理・再構成しながら理解を深めることができた。また、枝下用水資料室の方や下級生、保護者に向けて発表したり、講評を受けたりしたことで、自分たちの学びに自信と達成感をもつことができた。さらに、清掃活動への参加を通して、地域の歴史や文化を守る人々の思いに触れ、地域社会の一員として自分にできることを考え、主体的に社会に参画しようとする意識を高めることができた。以上のことから手立て④は有効であったと考える。

(2) 今後の課題

今回の実践を通して、多様な「人・もの・こと」と関わったことで、意欲的に学習問題の追究に向かう姿が見られた。また、地域の歴史や先人の働きを自分事として捉え、地域活動への参加を通して主体的に社会に関わろうとする意識を高めることができた。一方で、清掃活動の人手不足といった地域課題に対して目を向けることができず、具体的な対策を考えられなかった。学びを伝えることや地域活動で参加することで終わらず、さらにその先に何ができるかを児童と共に思案することが今後の課題と考える。

今回の成果を生かし、今後は課題を自ら発見し、地域の人々と協働しながら解決を図るとともに、社会の一員として主体的に行動する児童の育成を目指していきたい。